

# 無冠詞言語話者の英語冠詞の習得

## 一定冠詞と指示詞の区別に焦点をあててー

久米啓介

### 要旨

英語の冠詞は、母語 (L1) に冠詞の無い第二言語 (L2) 学習者にとって、特に習得が困難な文法項目である。本稿では、これまでに研究例が少ない定冠詞と指示詞の区別の習得に焦点を置き、主要先行研究である Ionin, Baek, Kim, Ko, and Wexler (2012) と Zhang (2021) の研究成果を概観し、残された研究課題について議論する。先行研究の結果からは、学習者の L1 に冠詞は無いが、L2 (= 英語) の冠詞や指示詞と意味・機能を一部共有する指示詞がある場合、L1 の指示詞の素性と使用条件を L2 の冠詞と指示詞の両方に転移することによる L2 の定冠詞と指示詞の混同が見られること、さらに、L1 指示詞の使用条件の違いによって無冠詞言語の母語話者間 (L1 韓国語 vs. L1 中国語) で習得過程に差が生まれる可能性が示唆される。そして、この分析の妥当性の検証に必要と思われる追試研究について論じる。

### キーワード

第二言語習得、英語、冠詞、指示詞、母語の影響／転移

#### 1. はじめに

英語の冠詞は、L2において学習者にとって母語話者のように習得することが困難な文法項目の1つであり、これまでに多くの研究がなされてきた (Cho, 2017; Huebner, 1983; Ionin, Ko, & Wexler, 2004; Thomas, 1989; Snape, 2008など)。特に、学習者の L1が無冠詞言語 (article-less language) (日本語など) の場合、他の冠詞言語 (article language) (スペイン語など) が L1 の場合に比べ、習得が難しいとされている (Snape, 2008など)。無冠詞言

語がL1であるL2学習者にとりわけ頻繁に見られる冠詞の誤用は、(1a)のような冠詞の使用が義務的な場面における冠詞の脱落である。それに加え、冠詞の選択を間違えるもの(不定冠詞aを選ぶべき文脈で定冠詞theを使用するなど)(1b)や、定冠詞と指示詞(demonstrative)(this, thatなど)を混同する誤り(1c)などがある。

- (1) a. You should use \*\_\_ blue pen and \*\_\_ left line is red.  
(a または the が必要)<sup>(1)</sup>
- b. The most valuable object that I have received is *the ball and the signature of the famous baseball player* is signed on it. (初めて言及される場合はaが正しい) (Ionin et al., 2004, p. 4に基づく)
- c. Richard went to a bookstore and bought two books to read. One of the books turned out to be long and boring. The other book had a really exciting storyline. So, Richard finished *#the book*. (thatがより自然)  
(Ionin et al., 2012, p. 80に基づく)

本稿では、研究例の少ない定冠詞と指示詞を混同する誤用に焦点を置き、無冠詞言語母語話者のL2英語における定冠詞と指示詞の区別の習得を扱った主要な研究の成果を概観し、残された研究課題について議論していく。なお本稿では、定冠詞と指示詞を比較する際、主要先行研究であるIonin, Baek, Kim, Ko, and Wexler (2012)とZhang (2021)が扱っている前方照応用法(anaphoric use)(=名詞句が表す指示対象が言語的な先行詞に依存する場合)に限定して議論する<sup>(2)</sup>。まず次節では、英語の冠詞と指示詞の意味・機能面での類似点と相違点を整理する。

## 2. 冠詞と指示詞

英語の定冠詞theは、通時的に指示詞thatから派生したと考えられており(Lyon, 1999)、両者は密接な関係にある決定詞(determiner)である。両決定詞は交換可能な文脈が多く、核となる意味概念として「唯一性

(uniqueness) (Heim, 1982)」を共有していると考えられている (Roberts, 2002; Wolter, 2006)。唯一性とは、「話し手と聞き手の両者にとって、唯一的に特定可能である指示対象 (referent) が存在すること」を意味する。しかし、定冠詞と指示詞の間には、指示対象の唯一性の成立条件に関して違いがあるとされている。具体的には、指示詞の場合、指示対象の唯一性が談話上の特に顕著な部分 (salient discourse)、典型的には直近の発話において成立する必要があるのに対し、定冠詞の場合は談話全体 (whole discourse) がその領域となる。例えば、照応的 (anaphoric) 文脈である (2) においては、最終文の woman の先行詞である A woman の指示対象が直近の発話内 (つまり、談話上の顕著な部分で) 導入されており、且つ談話全体においても、女性は1人しか存在してないことから、唯一的に特定が可能である。このような場合、the と that の両方を使用することが可能である。

- (2) 唯一性が談話全体、且つ直近の発話で成立する文脈(以下、「anaphoric 文脈」)

The curtain rose. A woman came onto the stage. Then the/that woman started singing and dancing. (Ionin et al., 2012, p. 75に基づく)

しかしながら、the と that の両方が使用可能な文脈においても、the が無標 (unmarked) の選択肢であるとされており、that を使用する際には、直近の発話での唯一性に加え、当該の名詞句が表すもの同士に何らかの対比 (contrast) があることが自然とされる (Roberts, 2002)。例えば、(2) の最終文において that を選択した場合、その場面において言及されていない他の女性 (woman) との何らかの対比がほのめかされているということになる。一方 (3) のように、他の女性との間ではなく男性 (man) との間に対比が見られる場合、that の使用が不自然になるとされる。

- (3) The curtain rose. A woman and a man came onto the stage. Then the/#that woman started singing and dancing. (Ionin et al., 2012, p.75に基づく)

また、指示対象が複数の場合は、定冠詞や指示詞（この場合、*those*）は、名詞句によって表されている談話上の実在物の最大数（*maximal entity*）、すなわち全てを指示するとされる（単数の場合は最大数が「1」となる）。したがって、(4) の *the/those dogs* は、談話にすでに導入されている5匹の犬（*five dogs*）を全て指す解釈しか許されない（例えば、5匹のうちの3匹を指すような解釈は存在しない）。

(4) The pet shop had five dogs and three cats. I bought the/those dogs.

(Ionin et al., 2012, p.73に基づく)

一方、指示対象が直近の発話においては唯一的に特定できるが談話全体では名詞句が表すものが複数存在しており唯一的に特定できない場合は、*that* は使用できるが *the* は不自然となる。例えば (5) では、談話全体で複数の女性（*A woman* と *another woman*）が存在するため、最終文の *that woman* は直前の発話で言及された女性を指示することはできるが、*the woman* ではそれができない。

(5) 唯一性が直近の発話のみで成立する文脈（以下、「*salient* 文脈」）

A woman entered from stage left. Another woman entered from stage right.  
#The/That woman was carrying a basket of flowers.

(Ionin et al., 2012, p. 75に基づく)

逆に、談話全体では唯一性が成立するが直近の発話では成立しない文脈においては、*the* のみが自然となる。例えば (6) では、最後から2番目の文の *book* の指示対象である最初の文で導入されている本（*a book*）の唯一性が直近の発話では成立していない。そのため、*that book* は不自然となるが、談話全体では唯一性が問題なく成立するため、*the book* は自然となる。

(6) 唯一性が談話全体で成立する文脈（以下、「*whole* 文脈」）

Vicky went to the library, and got out a book and a new magazine, and packed them in her bag. The next day, Vicky got on the train. She found her seat and sat down. Then, she read the/#that book. It was really interesting.

(Ionin et al., 2012, p. 80に基づく)

以上の英語の定冠詞と指示詞 (that/those) の類似点と相異点が記述的に妥当であることは、次節で概観する Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) が報告している英語母語話者の実験データによって支持されている。

### 3. L2英語冠詞習得におけるL1指示詞の影響

これまでのL2習得研究において、L1・L2間で意味・機能を一部共有する文法項目の習得が言語間転移 (cross-linguistic transfer) によって難しくなる可能性が指摘されているが (Gass & Selinker, 1992; Lardiere, 2008, 2009; Schwartz & Sprouse, 1996など)、近年、英語の定冠詞と指示詞の区別の習得におけるそれらのL2決定詞と意味・機能を共有する学習者のL1指示詞の影響を示唆する研究結果が報告されている。以下では、L1に冠詞は無いが指示詞はあるL2英語学習者を対象に、英語の冠詞と指示詞の習得におけるL1指示詞の影響 (意味・機能的転移) を検証した Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) の研究成果を概観し、残された研究課題について考察する。

#### 3. 1 Ionin et al. (2012)

Ionin et al. (2012) は、Robertson (2000) の口頭伝達タスク (oral communication task) において、中国語をL1とするL2英語学習者が、英語母語話者が定冠詞を使用する場面で指示詞を使用する傾向があったという報告にインスパイアされ、L1に冠詞は無いが冠詞と意味・機能を一部共有する指示詞がある英語学習者の英語冠詞の習得におけるL1指示詞の影響について体系的に検証した。具体的には、中国語と同じく無冠詞言語である韓国語をL1とする英語学習者を対象に、複数の種類の実験タスクを

用いて調査を行った。

Ionin et al. が対象とした L2学習者の L1である韓国語には、冠詞は無いが、前方照応の文脈で使用可能な指示詞 *ku* がある (Cho, 1999; 金水・岡崎・曹, 2002など)<sup>(3)</sup>。第一に、*ku* は *the* と *that* が共に使用可能な anaphoric 文脈 (7) において同じく使用が可能である。さらに、(8) は、(5) と同様に *that* のみが可能使用可能な salient 文脈であるが、*ku* も同じく使用可能である。つまり、*ku* は直近の発話において指示対象の唯一性が成立すれば使用でき、発話全体での唯一性を満たす必要はないと考えられる。この点では、*ku* は前方照応の文脈において *the* よりも *that* に近い性質を持っていると言える。

- (7) Tom-i nay-key chayk-ul sa-cwu-ess-ta. ku chayk-un caymi iss-ess-ta.  
Tom-nom I-to book-acc buy-past-dec that book-top interesting was.

‘Tom bought a book for me. The/that book was interesting.’

(Cho, 1999に基づく Ionin et al., 2012, p. 76 下線は筆者)<sup>(4)</sup>

- (8) yeca hanmyeng-i mwutay oynccok-eyse tulewassta.  
woman one-nom stage left-from entered  
talun yeca hanmyeng-i mwutay olunccok-eyse tulewassta.  
different woman one-nom stage right-from entered.

ku yeca-nun kkoch pakwuni-lul tulko issessta.  
that woman-top flower basket-acc carry-comp was

‘A woman entered from stage left. Another woman entered from stage right.

That woman was carrying a basket of flowers.’

(Cho, 1999に基づく Ionin et al., 2012, p. 76 下線は筆者)

しかしながら、他の文脈においては、*that* よりも *the* に近い振る舞いをすることも確認されている。例えば (9) は、話し手と聞き手が共有している経験や知識によって指示対象 (コーヒーショップ) が唯一的に特定で

きる文脈の例であるが、このような場合、ku が使用可能であるとされる。英語では、同様の文脈において、that よりも the がより適切だとされることから、この点では、ku は the により近いと考えられる。

(9) Ku coffee shop-ey semannaca.

the coffee shop-at see

‘See you at the coffee shop.’

(Cho, 1999に基づく Ionin et al., 2012, p. 77 下線は筆者)

以上のような言語事実に基づき、Ionin et al. は韓国語の指示詞 ku が指示詞の機能を有しながら定冠詞の一部の機能も担っていると結論付けた。そして、ku が the と that のいずれかに対応する文脈もあれば、両方に対応する文脈もあるという状況が、L1韓国語 L2英語学習者の冠詞と指示詞の区別の習得を困難にする原因となり得ると主張した。より具体的には、韓国語母語話者は、L2英語を習得する際に、英語母語話者が the と that のいずれかをより自然に感じる文脈で、the と that の両方を同程度容認したり、相互交換可能なものとして使用するといった誤用が生じると予測した。Ionin et al. は、このような L1の指示詞の影響が実際に見られるかを、中級～上級レベルの L1韓国語 L2英語学習者 (n = 48) と英語母語話者 (統制群) (n = 21) を対象に、誘因産出タスク (elicited production task) と絵を使った理解タスク (picture-based comprehension task) を用いて検証した。なお、Ionin et. al は、学習者の習熟度を多肢選択式のクローズテスト (cloze test) を用いて測定しており、40点満点中19～31点 (平均: 27.5点) の学習者を中級、32～37点 (平均: 34.2点) の学習者を上級と判定した (統制群の英語母語話者の平均は38.1点であった)。

誘因産出タスクは、anaphoric 文脈、salient 文脈、及び whole 文脈のテスト文を読み、単数の名詞に先行する最も自然な語を the、that、a、one の中から選択するという形式であった。前節でも見たように、英語母語話者であれば、anaphoric 文脈 (10a) では the と that の両方を自然であると判

断する（ただし、theの方がより自然である）のに対し、whole 文脈（10b）と salient 文脈（10c）では、それぞれ the と that が自然な選択肢であり、もう一方は各文脈が要求する唯一性の成立条件を満たしていないことから不自然であると判断することが予測される。

(10) a. anaphoric 文脈：the と that の両方が自然だが、the がより自然

Betsy was staying at a hotel, and didn't have anything to read. It was too early to go to bed. So she went to a bookstore, and bought a magazine. Then she came back to her hotel and read \_\_\_\_ magazine. She enjoyed it a lot.

b. whole 文脈：the は自然だが、that は不自然

Vicky was getting ready for a long train trip, and she wanted something to read on her trip, so she went to the library, and got out a book and a new magazine, and packed them in her bag. The next day, Vicky got on the train. She found her seat and sat down. Then, she read \_\_\_\_ book. It was really interesting.

c. salient 文脈：that は自然だが、the は不自然

Richard went to a bookstore and bought two books to read. One of the books turned out to be long and boring. The other book had a really exciting storyline. So, Richard finished \_\_\_\_ book. He read it in just one night.

(Ionin et al., 2012, pp. 79–80)

実験結果は以下の通りであった。

- 統制群の英語母語話者は、上記の予測通りの振る舞いを見せた。
- L1韓国語の上級 L2英語学習者は、すべての文脈において、英語母語話者と同様の傾向を示した。
- L1韓国語の中級 L2英語学習者には、英語母語話者が the を使用しない salient 文脈において、the を使用する誤用が多く（43%）見られた。さらに、

whole 文脈において、英語母語話者や上級学習者に比べ、the の使用頻度が顕著に少なかった（英語母語話者 95% ; 上級学習者 90% ; 中級学習者 67%）。

また、Ionin et al. は、L1の影響を考える上で、予め上記の実験とは別に、韓国語の当該文脈で[ku + 名詞]または裸名詞（無冠詞言語の名詞のデフォルト形）のいずれが好まれるかを調べるために、数名の韓国語母語話者にインタビューを行っている。その結果からは、anaphoric 文脈と salient 文脈では圧倒的に ku の使用が好まれるが、whole 文脈では好み割れると同時に、どちらの名詞句も完全には自然でないことが示唆された。Ionin et al. は、誘因産出タスクと韓国語母語話者へのインタビュー結果に基づき、L1韓国語 L2英語学習者は、the と that の両方を L1指示詞の ku に対応するものであると認識することで、ku の使用条件と the と that のそれを混同すること（つまり、L1の影響）により、一方が他方より好まれる文脈において英語母語話者のような区別をすることが困難になるのではないかと論じている。つまり、中級英語学習者は、the が認可されるためには、(ku や that とは異なり、) 唯一性が談話全体で成立しなければならないという条件をまだ十分に習得できていないと推測している。

さらに、絵を使った理解タスクにおいても、以下に説明するように、韓

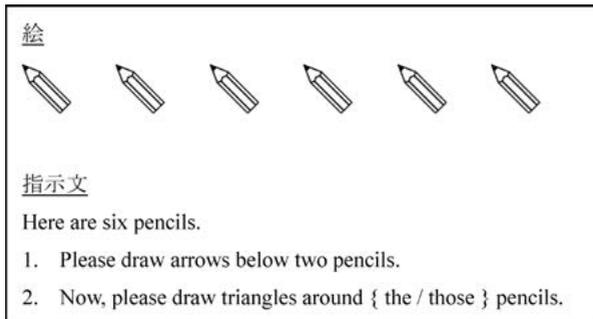


図1：Ionin et al. (2012) の解釈タスクの絵と指示文の例

国語母語話者の英語の定冠詞の解釈が L1の指示詞に影響を受けていることを示唆するデータが報告されている。理解タスクでは、図1のような絵と指示文を使い、学習者の冠詞と指示詞の解釈が検証された。具体的には、指示文2の決定詞が冠詞 (the) の場合と指示詞 (those) の場合で解釈の違いが見られるのかが検証された。

複数名詞に定冠詞や指示詞が使われる場合、談話上の名詞が表すもののうちの最大数を指示しなければならないが、その最大数が存在する範囲に定冠詞と指示詞の間で次のような違いが見られる。図1のテスト文の場合、定冠詞の場合は、「談話全体」の範囲の設定に柔軟性見られ、談話の始まりを Here are six pencils. とするか、もしくは、指示文1 (~ two pencils) とするか2通りの解釈が可能である。一方指示詞の場合、最大数を検索する範囲が直近の文である指示文1に限定される。これらの分析の妥当性は、理解タスクの英語母語話者(統制群)のデータによって支持されている。具体的には、英語母語話者は指示文2で指示詞 *those* が使われている場合、図2のように、指示文1で下に矢印を描いた鉛筆を三角で囲むという解釈のみを示し、定冠詞 *the* が使われている場合は、約半数が2本の鉛筆を囲む解釈を示し、残りの者は図3のように6本すべての鉛筆を囲む解釈を示したと報告されている。

そして興味深いことに、L1韓国語 L2英語学習者は英語母語話者とは大きく異なった解釈パターンを見せた。具体的には、指示詞が使われた場合

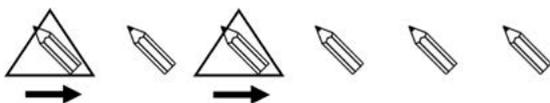


図2：指示詞 *those* の解釈の例

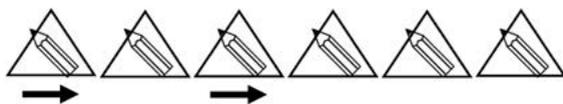


図3：指示詞 *the* の解釈の例

は、英語母語話者と同様に図2の解釈のみを示したものの、定冠詞が使われた場合であっても、ほぼ100%の確率で同様の解釈を示し、図3の解釈を示した学習者は皆無に等しかった。このような傾向が習熟度に関わらず見られた。この結果から、産出タスクにおいては母語話者同様の振る舞いをした上級学習者であっても、明示的に冠詞と指示詞の区別を意識することが無い理解タスクでは、冠詞に与えられている最大数の条件を談話全体に適応する解釈ではなく、L1指示詞 *ku* と同様に直近の発話に限定する解釈のみを選択している可能性が示唆される。この英語母語話者と異なる解釈パターンは、上級者にもまだL1の影響が残存している証拠であると Ionin et al. は分析している<sup>(5)</sup>。

以上の2種類の実験結果に基づき、Ionin et al. は、冠詞は無いが意味・機能的に類似した指示詞がある言語がL1のL2英語学習者は、L1の影響によって、L2の冠詞と指示詞を同様のものと認識し、その結果、両者を混同する誤用が起きると結論付けた。Ionin et al. は、当該のL1の影響を誘発する原因として、英語において定冠詞と指示詞の両方が使用可能な文脈が多数あることや、韓国語話者向けの英語の学習書・辞書及び教室指導において *the*、*that*、*those* が *ku* と翻訳される場合が多いことなどを挙げている。

### 3. 2 Zhang (2021)

Zhang (2021) は、Ionin et al. (2012) と同様の誘因産出タスクを使用し、韓国語と同じく冠詞は無いが指示詞がある言語である中国語の母語話者を対象に、L1指示詞がL2英語の冠詞と指示詞の区別の習得に与える影響を調査した。そして、L1の影響と同時に、インターフェイス仮説 (Interface Hypothesis, IH) (Sorace, 2011; Sorace & Filiaci, 2006など) の妥当性についても検証した。IHによれば、統語・意味・形態・音韻のような核文法 (Core Grammar) の要素と他の認知領域 (談話/語用など) のインターフェイス (interface) に関わる言語現象は、L2学習者にとって母語話者と同等に習得することが特に困難であるとされる<sup>(6)</sup>。前節で見たように、英語の *the* と *that* は共通した意味概念 (唯一性) を標示する決定詞であるが、当該の

意味概念を標示する上で、それぞれ異なった語用論的条件が課せられている（すなわち、使用できる文脈が異なる）。したがって、両者の区別は、意味概念の理解に加え、語用論的条件の習得が必要となることから、意味と語用のインターフェイス（semantics-pragmatics interface）に関連する言語現象だと考えられる。Zhang は、IH の観点からの研究例が無い the と that の区別の習得に焦点を置き、インターフェイスにおける習得可能性の問題を L1 の影響も考慮しながら検証した。

検証対象の L2 英語学習者の母語である中国語の指示詞 na は、(11) に示すように、英語の the や that と同様に anaphoric 文脈で使用可能である (Li & Thompson, 1981)。

(11) Chongwu shangdian zaichushou yi-zhi gou.

Pet shop selling one-CL dog

Wo jueding mai na-zhi gou.

I decide buy that-CL dog.

‘The pet shop is selling a dog. I decide to buy the/that dog.’

(Zhang, 2021, p. 372 下線は筆者)

しかし、na が whole 文脈や salient 文脈などの照応的文脈において英語の冠詞と指示詞のどちらにより近い性質を持っているのか、すなわち、na の唯一性の成立範囲が the のように談話全体なのか、それとも that のように直近の発話に限定されるのかについては議論がなされてこなかった。そこでまず Zhang は、Ionin et al. の誘因産出タスクの中国語版を用いて、中国語母語話者を対象に、the が that よりも好まれる whole 文脈 (10b) と that が the よりも好まれる salient 文脈 (10c) において、na がどの程度容認されるかを調査した。調査の結果、英語の the と同様に、whole 文脈では、na が高い確率（約91%）で容認され、salient 文脈では、容認されにくい（約36%）ことが明らかになった。この結果に基づき、Zhang は、指示詞 na が the と同様に談話全体で唯一性の条件を満たし、中国語には指示詞 that

に対応する決定詞が無いと結論付けた。

次に Zhang は、Ionin et al. と同様の誘因産出タスクを用いて、L1中国語 L2英語学習者が、whole 文脈と salient 文脈でどの程度 the と that を容認するかを調査した。調査には上級・母語話者並みの L2英語学習者である中国語母語話者 (n = 50) と英語母語話者 (統制群) (n = 14) が参加した<sup>(7)</sup>。実験結果は以下の通りであった。

- L1中国語の上級 L2英語学習者は、whole 文脈、salient 文脈のいずれにおいても、the と that のいずれか一方に対するはっきりした好みは見られなかった (両文脈において the と that の両方を60%以上の確率で容認した)。
- L1中国語の母語話者並みの L2英語学習者は、salient 文脈では、英語母語話者と同様に、the をあまり容認せず that を好んだが (容認度: the 約52%、that 約90%)、whole 文脈においては、the を好む英語母語話者とは異なり、that を the と同程度容認した (容認度: the 約96%、that 約89%)。

Zhang はこの結果を次のように説明している。(11) のような na と the と that が共起可能な文脈があることから、L1中国語 L2英語学習者は、Ionin et al. の L1韓国語話者と同様に、L1の指示詞と the と that を混同し、the と that のいずれかのみが容認される文脈において両方を同程度容認する発達段階がある (すなわち、whole 文脈で that を過剰に容認し、salient 文脈で the を過剰に容認する)。しかし、言語インプットが蓄積し、習熟度が上がるにつれて、母語話者並みの学習者に見られたように、母語話者と同様の the と that の区別が (一部ではあるが) 可能になる。具体的には、唯一性の標示において、L1指示詞 na と同じ語用的条件が適用される the に関しては、L1からの正の転移の結果、文脈による容認度の違いを習得することができる。しかし、当該文脈において対応する L1語彙項目がない that に関しては、母語話者並みのレベルに達してもなお、文脈によ

る容認度の違いの習得が依然として困難であり続ける（すなわち、whole 文脈において that を誤って容認し続ける）。

以上の結果から、Zhang は、IH によって習得が困難であることが予測される the と that の区別のようなインターフェイスに関わる言語現象の習得においても、L1 に対応する語彙項目があるかどうかという要因が習得可能性に影響すると主張した。また、学習者グループ間で過去に英語圏で生活した期間に明らかな差（滞在期間：母語話者並み>上級）があったことから、英語圏での生活経験で得た豊富な言語インプットによって the と that の区別の習得が（一部ではあるが）促進されるのではないかと Zhang は推測している。

#### 4. 考察

Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) の研究結果からは、冠詞の無い言語を L1 とする L2 英語学習者が、照応的文脈 (anaphoric・whole・salient 文脈) における英語の定冠詞と指示詞の区別を習得する際に、L1 の指示詞に影響を受ける可能性が示唆される。また、Ionin et al. の上級学習者の理解タスクや Zhang の上級及び母語話者並みの学習者の産出タスクでの振る舞いより、L2 習得がかなり進んだ（習熟度が高くなった）段階においても、依然として英語母語話者と同様の言語知識に到達することが困難であることが示唆される。このことから、これまでの英語冠詞の L2 習得研究が示すように、やはり英語冠詞は、（とりわけ無冠詞言語の母語話者にとって）L2 での習得が困難な文法項目の 1 つであると言えそうだ。そして興味深いことに、Ionin et al. と Zhang はいずれも L1 に冠詞の無い言語の L2 英語学習者を対象に同様のタスクを用いて実験を行ったものの、両者の結果には類似点がある一方で、学習者の L1 の違い（韓国語 vs. 中国語）によると考えられる相異点も見られる。以下に類似点と相異点を整理し、学習者集団間に見られた差異の原因について考察したい。

まず、韓国語母語話者と中国語母語話者に共通した傾向として、salient 文脈における the と that を混同することによると見られる the の過剰使用

が挙げられる<sup>(8)</sup>。その一方で、誘因産出タスクでは、韓国語母語話者は上級レベルに達した時点で英語母語話者と同様の区別ができているのに対し、中国語母語話者は英語母語話者並みの習熟度に達してもなお、特に *that* の使用に関して英語母語話者と異なった振る舞いをしており、英語の冠詞と指示詞の区別の習得が未完に終わっていることが示唆される。すなわち、学習者の L2 習熟度を考慮すると、韓国語母語話者の方が中国語母語話者と比べて当該の言語現象の習得が進んでいると捉えることができる。この違いはどのような原因によるのであるのだろうか。

第一に、Zhang が主張するように、L1 に *that* と対応する語彙項目が無いことによって、中国語母語話者の *that* の使用条件の習得が困難になっていると仮定しよう。この論理に従えば、韓国語母語話者の場合、韓国語の *ku* は中国語の *na* とは異なり *that* に近い振る舞いをするため、中国語母語話者が困難を伴う *that* の使用条件の習得が促進されている（したがって、より早く習得ができる）と考えられる。そして同様の理由で、Zhang も論じているように、中国語母語話者は、使用条件の面で *the* に対応する L1 指示詞 *na* があることにより、*that* に比べて *the* の習得が容易になっているのかもしれない。以上の分析が正しいと考えた場合に生じる 1 つの疑問は、中国語母語話者とは違い、*the* に対応する L1 指示詞がない韓国語母語話者がどのようにして *the* の使用条件が韓国語の指示詞 *ku* とは異なる *whole* 文脈において *the* と *that* の区別の習得が可能になるのかである。見方を変えれば、*whole* 文脈において、なぜ中国語母語話者は韓国語母語話者のようには *the* と *that* の区別ができるようにならないのだろうか。以下では、L1 の影響（及びそれに起因する L2 習得上の問題）を克服するために必要な言語インプットの違いに注目して説明を試みる。

まず、言語理論（とりわけ生成文法）に基づく L2 習得研究において近年広く支持されている「素性再構築仮説（Feature Reassembly Hypothesis, FRH）」（Lardiere, 2008, 2009）に基づいて、L1 による習得タスクの違いについて考えてみよう。FRH によると、L2 習得における主要なタスクは、L1 の語彙項目に結びつけられた素性の組み合わせ（feature bundles）を L2

のものに構築し直すことであるとされる。具体的には、利用可能な言語インプットを手がかりに、L1とL2の（素性の組み合わせとしての）語彙項目の意味や機能の類似性を検知し、最も類似していると認識されるL1とL2の語彙項目同士の素性や使用条件をマッピング（mapping）していく。このマッピングが行われた際に、当該のL1とL2の語彙項目の素性の組み合わせや使用条件にズレがあれば、さらなる言語インプットを手がかりに素性の組み合わせや使用条件を再構築する必要がある（使用条件も「文脈に関係する素性」と考えることができるため、以下、まとめて「素性」と呼ぶ）。そして、再構築のために必要な情報が言語インプットからどれだけ検出しやすいか（detectability）によって、当該のL2の語彙項目の習得難易度が変化するとされ、素性の再構築に必要な情報を含む言語インプットが得られない場合、習得が困難になることが予測される。

以上のFRHの仮定が正しければ、韓国語母語話者と中国語母語話者は、それぞれのL1の指示詞と共通した意味・機能を持つ（すなわち、唯一性という意味概念を照応的文脈で標示する）英語のtheとthatの両方をマッピングする段階を最初に経る可能性がある。この段階では、theとthatを相互交換可能なものと認識することによっていずれかが好まれる文脈でもう一方を過剰に容認する傾向が見られることが予測される。したがって、Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) においてL1韓国語の中級学習者とL1中国語の上級学習者に共通して見られたtheとthatの混同はこの発達段階にいる学習者に起きるものであると考えることができる。この点に関してはL1の違いによる差は予測されないが、FRHが想定する次の習得タスクである素性の再構築の内容はL1によって異なってくる。具体的には、中国語母語話者はthatの使用条件の再構築、韓国語母語話者はtheの使用条件の再構築が必要となる。すなわち、例えば、中国語母語話者は「whole文脈でthatが使えない」ことを、韓国語母語話者は「whole文脈でtheが使える」ことを学習する必要があるが、次のような理由で再構築の難易度に差が出る可能性がある。第一に、照応的文脈におけるtheとthatの区別は、一般的に英語教育において扱われていない項目であるため、L2学習者が

明示的な指導を受ける可能性は極めて低い。したがって、学習者は、各々が利用可能な言語インプットに含まれる肯定的証拠 (positive evidence)、すなわち、「ある表現が文法的 (使用可能) である」という情報をもとに、対象の言語知識を習得する必要がある。そうであるとするならば、韓国語母語話者は、言語インプットを通して、whole 文脈において the が使われていることに気づくことができれば、「the が使用できる」ことが学習可能であると考えられる。一方中国語母語話者は、the と that を区別するために、同文脈で「that が使用できない」ことを示す何らかの否定的証拠 (negative evidence) が必要であると考えられるが、上記の理由でそれを得ることが一般的に困難であると思われる。その結果、that の使用条件がなかなか学習できず、習熟度が上がっても、the と that の区別が十分にできるようにならない可能性がある。なぜならば、たとえ学習者が豊富な言語インプットを得て、肯定的証拠をもとに「whole 文脈で that が使われていない」ことに気づくことができたとしても、それ自体は「that が使用できない」ことを示す決定的な証拠にはならないからである。実際に、FRH の枠組みでなされたこれまでの L2 習得研究においても、再構築に必要であると考えられる否定的証拠が得られない状況においては、そうでない場合に比べ習得が著しく遅くなる、または不可能になることを示唆するデータが報告されている (Gil & Marsden, 2013; Su, 2019; Yuan, 2014 など)。以上のように、FRH の観点から学習者の L1 別に異なった習得タスク (素性の再構築) を仮定し、そのタスクの遂行に必要なと思われる証拠が言語インプットから得られるかどうかを考慮すると、Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) の学習者の間に見られた L1 の違いによると思われる差異の大部分は説明可能であると考ええる。

上の分析の問題となりえるのは、韓国語母語話者が「salient 文脈において the が使えないこと」を学習するのが困難であることが予測されるが、Ionin et al. の誘因産出タスクのデータを見る限りでは、上級者の段階ですでに母語話者と同じように the と that の区別ができていた点である (中国語母語話者に関しては、na が the と同様に不自然である文脈であり、且つ

「that が自然である」ことは肯定的証拠のみで学習ができるため、特段困難は予想されない)。しかしながら、Ionin et al. の理解タスクにおいては、韓国語母語話者である上級学習者であっても、the の解釈に関しては、L1 の影響によると考えられる英語母語話者とは大きくことなったパターンを示していることから、その意味では、韓国語母語話者にとっても L1 の影響を完全に克服することは容易ではないと思われる。

最後に、L1 の影響について残る疑問点について議論したい。上述のように、韓国語母語話者と中国語母語話者に見られた発達の違いは L1 の影響によるものであると考えられる。しかしながら、両学習者集団に共通して見られた初期段階の the と that の混同に関しては、Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) は共に L1 の影響であるとしているものの、その真偽はまだ確定していないと思われる。なぜならば、当該の the と that の混同が特定の母語を持つ学習者にだけ見られる誤用ではなく、非母語 (non-native language) として英語を習得する際に学習者の母語に関わらず見られるものである可能性が残されているからである。すなわち、韓国語や中国語のような無冠詞言語の母語話者でなく、スペイン語のような冠詞言語の話者にとっても同様の誤用が見られる可能性がある。例えば、IH の観点からは、the と that の区別はインターフェイスに関わる現象であるため、L1 の別を問わず L2 学習者にとって習得に困難が伴うことが予想される。つまり、たとえ英語と同様の意味・機能を持つ定冠詞と指示詞の区別が存在する言語が L1 である学習者であったとしても、L2 英語においては同様の区別をすることが困難である可能性がある。一方、もし当該の誤用が L1 からの転移に起因するものであるとするならば、L1 に the と that に対応する冠詞と指示詞がある言語 (スペイン語など) の L2 学習者の場合、言語インプットを基に、当該の L1 と L2 の語彙項目との意味と機能の類似性に気づき、語彙項目間の素性のマッピングを行いさえすれば、その後は the と that の混同が見られないはずである<sup>(9)</sup>。この場合、先行研究の韓国語や中国語の母語話者に比べて、the と that の混同期が顕著に短い、もしくは見られないことを予測する (この点に関しては「今後の研究課題」でより詳

しく触れる)<sup>(10)</sup>。以上のように、現状では L1 の影響の範囲がまだ不確定であると思われ、Ionin et al. も述べているように、冠詞言語の母語話者を対象とする追試研究が望まれる。

## 5. 今後の研究課題

前節の議論を踏まえると、今後の研究課題として先行研究の L1 の影響についての議論をより精密化する必要があると思われる。少なくとも新たな L2 学習者集団を対象に、先行研究と同様のタスクを用いて次のような 2 種類の追試研究を行う意義があるだろう。

- 追試研究 1：英語の *the* や *that* に対応する冠詞と指示詞がある言語（スペイン語など）が L1 である L2 英語学習者を対象に、先行研究において冠詞は無いが *the* や *that* と意味・機能を一部共有する指示詞がある言語（韓国語・中国語）が L1 である L2 英語学習者に見られたような *the* と *that* の混同が見られるかどうかを検証する。
- 追試研究 2：先行研究ではまだ扱われていない無冠詞言語（日本語など）が L1 である L2 英語学習者を対象に、先行研究に基づく L1 の影響についての予測が妥当かを検証する。

以下では各追試研究について詳しく説明する。

### 5. 1 追試研究 1

前節で議論したように、L2 英語学習者の *the* と *that* の区別の習得における L1 の違いによると思われる習得過程の差異は、L1 の影響及びそれによって異なる習得タスク（素性の再構築）を克服するのに必要な言語インプットの違いに起因する可能性がある。先行研究において相対的に習熟度の低かった学習者集団（Ionin et al. の中級学習者と Zhang の上級学習者）に共通して見られた *the* と *that* の混同の原因が、L1・L2 間の素性のマッピングにおけるズレ（すなわち、L1 の影響）にあるのか（可能性 1）、それとも

L2学習者一般に当てはまる習得の困難性（例えば、IHが主張するような当該の言語現象が格文法と他の認知領域間の情報を統合することの困難性など）にあるのか（可能性2）、あるいは両要因の相互作用によるものなのか（可能性3）については今後の検証が必要である。

以上の点を明らかにするためには、Ionin et al. も述べているように、定冠詞と指示詞のL1・L2間の素性のマッピングにズレがない言語（スペイン語など）の母語話者とズレがある言語（韓国語・中国語など）の母語話者との比較が有用である。もしL1・L2間の素性のマッピングにズレがない英語学習話者にtheとthatの混同が見られないのであれば、L1の影響（L1・L2間の素性のマッピングにおけるズレの有無／素性再構築の有無）が問題である可能性が高くなる（可能性1）。対して、もしL1・L2間の素性のマッピングにズレがない英語学習話者にも同様の誤用が見られるのであれば、原因はL2学習者一般に関わる当該の言語現象固有の習得困難性にあると考えられる（可能性2）。しかし注意したいのは、上記のtheとthatの混同の有無だけが先行研究の主張するL1の影響の根拠ではないという点である。むしろ、その後の発達過程における違いがL1の影響を示唆するより強い証拠となっている（例えば、誘因産出タスクの上級学習者を比較すると、韓国語母語話者は英語母語話者と同様の区別ができているのに対し、中国語母語話者は一部の文脈においてそれができていない）。したがって、L1・L2間の素性のマッピングにズレがない学習者にtheとthatの混同が見られたとしても、そのこと自体はL1の影響への反証とはならない。その場合の妥当な結論は、当該の言語現象の習得にはL2学習者に共通した困難性が見られると同時に、L1の影響によって（部分的であっても）その困難性を克服できる可能性があるということだろう（可能性3）。Zhangの母語話者並みのL2英語学習者がthatの習得は不完全に終わっているもののtheに関しては当該の文脈で同じ使用条件が適用されるL1の指示詞naの転移によって習得が促されるという分析がその一例である。L1による同様の習得促進効果がL1・L2間の素性のマッピングにズレがない学習者にも見られる仮定すると、L1・L2間の素性のマッピングに

ズレがある学習者よりも早く英語母語話者と同様の区別が可能になることが予測される。例えば、Ionin et al. の韓国語が L1 の上級学習者は、産出タスクにおいて英語母語話者と同様の振る舞いを見せたにもかかわらず解釈タスクでは母語話者とは異なる the の解釈を示したが、同様の解釈タスクを L1・L2 間の素性のマッピングにズレがない上級学習者に実施する場合、英語母語話者と同様の解釈ができる可能性がある。

## 5. 2 追試研究 2

先行研究が主張する L1 の影響の妥当性をさらに検証するために、韓国語や中国語と同様に冠詞は無いが指示詞はある他の言語の母語話者を対象に研究するのも意義があるだろう。例えば、無冠詞言語である日本語の母語話者を対象とした研究は管見の限りまだないが、先行研究の結果及び分析が正しいと仮定すると、L1 日本語 L2 英語学習者を対象に追試研究を行った場合、L1 の影響に関して以下のような予測を立てることができる。

日本語の言語的先行詞を伴う照応的文脈では、中称指示詞「その」が最も一般的に使用される語彙項目である (Hoji, Kinsui, Takubo, & Ueyama, 2003; 堤, 2012 など)。(12) は Ionin et al. で研究対象となった 3 種類の照応的文脈において [その + 名詞] (下線) を使用した文である。英語において the と that の両方が容認される anaphoric 文脈 (12a) においては、韓国語の ku や中国語の na と同様に、「その」の使用が自然であるのに対し、whole 文脈 (12b) と salient 文脈 (12c) においては英語の that や韓国語の ku と同様の容認性の分布が見られることから、「その」は唯一性の成立範囲が直近の発話に限定されると考えられる<sup>(11)</sup>。つまり、「その」は韓国語の ku と同様に the よりも that により近い性質を持っていると考えられる。

### (12) a. anaphoric 文脈

幕が上がった。1 人の女性が舞台に現れた。その女性は歌って踊り出した。(舞台に現れた女性を指す解釈)

### b. whole 文脈

ある女性は電車での長旅に備えて、何か読むものが欲しかった。彼女は図書館に行き、本と雑誌を1冊ずつ借り、旅行カバンに詰め込んだ。翌日彼女は電車に乗り、席を見つけて座った。そして#その本を読んだ。とても面白い本だった。(図書館で借りた本を指す解釈)

c. salient 文脈

1人の女性が舞台の左側から現れた。そしてもう1人の女性が舞台の右側から現れた。その女性は花かごを運んでいた。(舞台の右側から現れた女性を指す解釈)

これまでに見た英語・韓国語・中国語・日本語の当該の照応的文脈における決定詞の分布をまとめると表1のようになる。

表1 決定詞の分布の言語間比較

	英語	韓国語	中国語	日本語
anaphoric 文脈	✓the, ✓that	✓ku	✓na	✓その
whole 文脈	✓the, #that	#ku	✓na	#その
salient 文脈	#the, ✓that	✓ku	#na	✓その

✓自然 #不自然

以上の言語記述が正しく、且つ先行研究と同様のL1の影響が見られると仮定するならば、日本語母語話者がL2英語でtheとthatを習得する際に、L1指示詞「その」の意味・機能が転移(L1・L2間の素性のマッピング)の対象となることが予測される。つまり、先行研究と同様のタスクを実施した場合、習熟度等の要因を統制すれば、韓国語母語話者と同様の結果が得られることが予測される。具体的には、L1の影響により、salient文脈とwhole文脈においてtheとthatの混同が見られる段階があるが、習熟度が上がるにつれて、少なくとも誘因産出タスクにおいては英語母語話者と同様の区別が可能になることが予測される。

## 6. おわりに

本稿では、無冠詞言語の母語話者の L2 英語の定冠詞と指示詞の区別の習得における L1 の影響に焦点を当て、先駆的な研究である Ionin et al. (2012) と Zhang (2021) の研究成果に基づき今後の研究課題について議論した。これらの研究からは、無冠詞 L1 の L2 英語学習者が L1 の影響によって英語の定冠詞と指示詞を混同する誤用が生じている可能性が示唆されると同時に、同じ無冠詞言語であっても L1 指示詞の使用条件の微妙な違いによって L2 冠詞・指示詞の区別の習得の過程やその難易度に興味深い差が生まれる可能性が見えてきた。L1 の影響の詳細については今後さらなる研究が必要であるが、本稿がその足がかりとなることを願っている。

## 注

- (1) 「\*」は非文法的であることを表し、「#」は非文法的ではないが不自然であることを表す。
- (2) したがって本稿では、直示用法 (deictic use) については扱わない。また、前方照応用法において、that/those に比べて使用範囲が著しく限定的な近称指示詞 (proximal demonstrative) の this/these についても本稿の射程外とする。
- (3) 韓国語において近称指示詞 *i* が前方照応文脈で使用されることもあるが(金水・岡崎・曹, 2002)、本稿では、Ionin et al. (2012) にならい、英語の the と that の違いに焦点を置くため、that に対応すると思われる *ku* のみを扱う。
- (4) 本稿で使用するグロスの略号は次の通りである：acc = 対格 (accusative)；CL = 類別詞 (classifier)；com = 補文標識 (complementizer)；dec = 叙述の終助詞 (declarative)；nom = 主格 (nominative)；top = 話題標識 (topic)。
- (5) Ionin et al. は、韓国語版の解釈タスクを数問使用し、数名の L1 韓国語話者を対象に、[指示詞 + 名詞] が、英語の指示詞と同様に、指示文 1 以降を談話全体とする(最大数の指示対象を直近の発話に求める)解釈を選ぶことを確認している。
- (6) より厳密には、IH は、インターフェイスを核文法内の要素間に関連するもの(統語と意味のインターフェイスなど)を「内部インターフェイス (internal interface)」、核文法の要素と他の認知領域に関連するものを「外部インターフェイス (external interface)」として区別しており、前者は母語話者同様に習得できる可能性があるが、後者はそれが難しいと主張している。本稿で扱うのは

外部インターフェイスのみであるため、便宜上、「インターフェイス」という略称を用いる。

- (7) Zhang (2021) は Ionin et al. (2012) と同様の多肢選択式のクローズテストを用いて習熟度を測定しており、上級学習者の得点は Ionin et al. のそれと同水準であり、また、母語話者並みの学習者は母語話者統制群と同水準であった。
- (8) 査読者より、「the と that の過剰使用が起きた理由の1つとして、実験が the と that の調査であると実験参加者が気づいていた可能性はないか」との指摘があった。Ionin et al. と Zhang はテスト文の約半数をフィラー／ディストラクターにし、実験の意図を分かりにくくする工夫を施しているものの、その可能性を完全には排除できない。しかしながら、特に文脈や学習者の L1 による the と that の過剰使用の程度差については、本稿で展開しているような言語分析及び第二言語習得理論無しでは説明が難しいと思われる。
- (9) スペイン語は、英語の定冠詞 the と指示詞 that に対応するものとして定冠詞 *ellos/la/las* と指示詞 *ese* がある (Zulaica Hernández, 2009 など)。
- (10) 韓国語や中国語の母語話者に比べると顕著に短いものの、スペイン語母語話者であっても同様に the と that の混同が見られる可能性があると考えられるのには、例えば次のような理由がある。the の that の使い分けに語用的要因が関わっていることもあり、英語母語話者によっても使用範囲や言語直観に揺れが見られる現象であることから (Ionin et al., 2012 の統制群のデータ参照)、学習者が一貫した言語インプットが得られにくい、つまり、形式・意味・機能の対応の検出性が低くなる可能性がある。その場合、FRH が想定する最初のタスクである L1・L2 語彙項目間の素性のマッピングを行うこと自体が困難になることも考えられる。
- (11) 本稿の指示詞「その」に関する容認性の判断は、日本語母語話者である筆者と数名のインフォーマントに基づくものであるので、今後日本語母語話者を対象に、Zhang (2021) が中国語母語話者を対象に行ったような実証実験を行う必要がある。また、Ionin et al. (2012) が報告している韓国語母語話者の容認性判断に関しても同様のことが言える。

## 参考文献

- Cho, H-S. (1999). Interpretation and function of the Korean demonstrative *ku*. *International Journal of Bilingualism*, 21(3), 71-90.

- Cho, J. (2017). The acquisition of different types of definite noun phrases in L2-English. *International Journal of Bilingualism*, 18, 367–382.
- Gass, S. & Selinker, L. (Eds.). (1992). *Language transfer in language learning*. Amsterdam: Benjamins.
- Gil, K.-H. & Marsden, H. (2013). Existential quantifiers in second language acquisition: A feature reassembly account. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 3(2), 117–149.
- Heim, I. (1982). The semantics of definite and indefinite noun phrases (Doctoral dissertation). Retrieved from ProQuest Dissertations and Theses database. AAI8229562
- Hoji, H., Kinsui, S., Takubo, Y., & Ueyama, A. (2003). The demonstratives in modern Japanese. In Y.-A. H. Li & Y. Simpson (Eds.), *Functional structure(s), form and interpretation: Perspectives from east Asian languages* (pp. 97–128). New York, NY: Routledge.
- Huebner, T. (1983). *A longitudinal analysis of the acquisition of English*. Ann Arbor, MI: Karoma.
- Ionin, T., Baek, S., Kim, E., Ko, H., & Wexler, K. (2012). That's not so different from the: Definite and demonstrative descriptions in second language acquisition. *Second Language Research*, 28(1), 69–101.
- Ionin, T., Ko, H., & Wexler, K. (2004). Article semantics in L2 acquisition: The role of specificity. *Language Acquisition*, 12(1), 3–69.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002). 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」, 生越直樹編, 『対照言語学 シリーズ言語科学 4』 (pp.217–247). 東京大学出版会.
- Lardiere, D. (2008). Feature assembly in second language acquisition. In J. M. Liceras, H. Zobl, & H. Goodluck, (Eds.), *The role of formal features in second language acquisition* (pp. 106–140). New York, NY: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lardiere, D. (2009). Some thoughts on the contrastive analysis of features in second language acquisition. *Second Language Research*, 25(2), 173–227.
- Li, C. & Thompson, S. (1981). *Mandarin Chinese: A functional reference grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Lyons, C. (1999). *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roberts, C. (2002). Demonstratives as definites. In K. van Deemter & R. Kibble (Eds.), *Information sharing* (pp. 89–196). Stanford, CA: CSLI.
- Robertson, D. (2000). Variability in the use of the English article system by Chinese learners

- of English. *Second Language Research*, 16(2), 135–172.
- Schwartz, B. D. & Sprouse, R. A. (1996). L2 cognitive states and the Full Transfer/Full Access model. *Second Language Research*, 12, 40–72.
- Sorace, A. (2011). Pinning down the concept of “interface” in bilingualism. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 1(1), 1–33.
- Sorace, A. & Filiaci, F. (2006). Anaphora resolution in near-native speakers of Italian. *Second Language Research*, 22(3), 339–368.
- Snape, N. (2008). *The acquisition of the English determiner phrase by L2 learners: Japanese and Spanish*, Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.
- Su, J. (2019). Reassembly of plural and human features in the L2 acquisition of Chinese by adult Korean speakers. *Second Language Research*, 35(4), 529–555.
- Thomas, M. (1989). The acquisition of English articles by first- and second-language learners. *Applied Psycholinguistics*, 10(3), 335–355.
- 堤良一 (2012). 『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版.
- Wolter, L. (2006). *That’s that: The semantics and pragmatics of demonstrative noun phrases* (Unpublished doctoral dissertation). University of California at Santa Cruz.
- Yuan, B. (2014). ‘Wh-on-earth’ in Chinese speakers’ L2 English: Evidence of dormant features. *Second Language Research*, 30(4), 515–554.
- Zhang, L. (2021). The influence of first language at the semantics-pragmatics interface: Evidence from definite and demonstrative determiners in L2 English. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 11(3), 368–388.
- Zulaica Hernández, I. (2009). On the cognitive status of antecedents in Spanish discourse anaphora. In P. Cantos-Gómez and A. Sánchez-Pérez (eds.), *A Survey on Corpus-based Research: Proceedings of the First International Conference on Corpus Linguistics (CILC I)* (pp. 646–663). University of Murcia (Spain).